



## 第 10 回

### 平成 25 年"夢アイデア"審査を終えて

平成 26 (2014) 年 1 月

夢アイデアは今回で 10 年目を迎える。節目らしく新しいタイプの提案が目についた。

まず、小、中学生をはじめ若い世代の提案が目立ったことである。最優秀賞を獲得した「農業シェアハウス」は耕作放棄地や空き家が目立つ過疎の農村の再生を、若者に呼びかける青森県の高中生グループの提案だった。また、提案内容もこれまでのハード型提案からソフト型に変わった。時代、社会の変化に敏感に反映して、街づくりへの発想、提案の中身が変化して行くことを示している。これから次世代が担う 10 年が楽しみだ。

まず世代的な変化である。最優秀作品のしっかりと現実を抑えた「農業シェアハウス」や街への初々しいまなざしを感じさせた「中学生による 7 つの街づくり」など小中学生、高校、大学、若者、親子の目から街づくり提案が目立ったのが今年の特徴だ。若い世代の提案が全体の 3 分の 1、14 件に上った。

何よりプレゼンテーションが会場に響き、元気が良い。提案もその実現性はともかく、発想が旧世代と違い、斬新だ。エネルギー溢る新発想は、街を刷新する。次世代を担う彼らのアイデアを大切にすること、街づくりへの目は大きく育てなければならない。夢アイデア事業の成果と言っても良いだろう。

提案「街のコピー」は印象に残るものだった。これまで、夢アイデアの提案は、どちらかといえば「ハード」が中心だった。この作品は湯の街・別府を素材にしたコピー。別府の父と呼ばれ、駅前に飛び上がろうとする銅像がある油屋熊八の有名なコピー「山は富士、海は瀬戸、湯は別府」の若者・現代版だ。「別府の温泉と俺の才能は掘ればたいてい湧いてくる」「生きているけど、生き返るんだよなあ」「入るまでたしか、忘れたいことがあった」等々、どれも面白い。うーんと、うならせる。ハード同時に、ソフトが街づくりに大きな役割を果たすと思わせる、これまでにない提案だ。

都市ではインフラはほぼ整備されているが、無機質、無表情。都市は異邦人、ストレンジャーの集まり。しかし、若者は生き生きと暮らす。「街を知り」「想い」「愛する」心が、一つの表現を取る。多く人が足を止めることなく通りすぎる。その年の一角にたたずみ、やがて「好き」という気持ちが入って「共感」を呼ぶ言葉が浮かび、深

まり「街が好きになる」コピーへと繋がる。言葉だけでなく、デザイン（郷中塾の提案）イベントによる街づくりの提案などが今年の応募作品に多く見られた。猿田彦の言葉、タイムカプセル・縁の村づくり提案もこの系列につながる。街づくりの言葉探し。それも一つの時代かもしれない。

都市には「原風景」がない。多くの人の心の原風景は自然にある中にある。都会の子供たち原風景とはなんだろうか。都市は彼らにそれを与えることが出来るだろうか。日本で本格的な都市化が始まって50年余、どのような都市の風景を創出すれば、次の世代の心に刷り込める原風景を創り出せるのだろうか。

都市空間の活用は、街づくりの基点となる。それは広場であったり、空き地であったり、道路であったりする。何か創造力をかきたてる空間が人々の思考を刺激する。提言の中で目立ったのは、「道路」であった。道路空間は、生活に最も近い、なじみのある空間だろう。多くの人々が、その空間を車に奪われ、近寄れない空間にしてしまった。都市部だけではない。地方でも外を歩く人、談笑する人、あいさつを交わす人の姿は見ることは出来ない。

人々は考える。どうしたら、道路空間を自分たちのなじみやすいものにすることが出来るのだろうか、と考えた。街なかランニングコース、長崎の坂の活用、歩道橋のバス停利用、「線から塊の道」などの提案も、多彩だった。大淀川のほとりの周遊散策路の提案、熊本・合志の堀川沿いの道づくりなどの提案はそうした気持ちを実現させようとするれば可能な提案に思える。

都市部では、最も身近な車・自転車が走れる道路空間がない。歩道は歩く人に危険だとされ、車道の片隅を、危険に身をさらしながら走っている。自転車道は確保できないのか。九州では軽自動車が多いが、都市部でもっと市民権を与えられないのか。Jカーとして、都市部に専用道路をつくったり、自転車と軽自動車のみが乗り入れる道路空間は造れないのか。人々はアイデアを絞っている。環境的にもいい、省資源でもある。女性が運転をしやすい。その中で、ユニークなのがロボット専用道路の提案だ。高齢者や、子供たちが自動二輪車を自在に操縦して「歩き回る」省エネ型団地の提案がURで検討されたことがある。再生アイデアが今年も多かった。

夢アイデア事業が10年を経過した。市民から「街づくり」提案を募集しようというこうした企画は、1回限りのイベントで終わるのが通常である。しかし、スタートから10年という歳月はそこに主催者の【持続する志】が高く強かったことを感じさせられる。土木・あるいは技術が「一般の素人」の意見を耳を傾けようという事はほとんどなかったと思う。専門性は(素人の)口出しを嫌う。その意識が自分たちを一角上の存在であるかのような勘違いをさせる。その意識からの脱却は、易しそうで、難しい。

しかし、土木は「市民性」を失っては存在しない。社会は市民が求めるものから遊離したものを切り捨て、敵対するからだ。市民の夢を実現してこそ、本来の存在が認められる。それはシビルエンジニアリング、土木の原点でもある。

時に人は原点を見失う。市民に寄り添おうとする原点、その「持続する志」が、この事業にある。さらなる10年への歩みを期待したい。

玉川 孝道（西日本新聞元副社長）

夢アイデア審査委員長（平成22年～令和2年）